

丹波の森づくりのこれから

<p>丹波の森宣言</p> <p>丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。今、私たちはこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。</p>	<p>これまでの取組</p>	<p>環境変化</p> <p>生活者の視点</p> <p>～ 未来へつなぐ ～</p> <p>もりびとライフスタイル</p>	<p>取組の方向性</p>	<p>新たに加える取組</p>	<p>30年後の丹波の森のイメージ</p> <p>最先端のテクノロジーが生活のすみずみまで行き渡った未来社会にあって、自然、食、工芸など丹波の森の素材で心安らぐ魅力への憧れやニーズが高まっている。そして、「もりびとライフスタイル」を創造していく丹波の森づくりが一層注目を浴び、ロゴマークが定着、ブランド化している。</p>
<p>1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・県線条例による開発の規制誘導 丹波の森づくりを土地利用の面から支援する県条例を制定、地域の7割を森を守る区域に指定 ・篠山市まちづくり条例の改正 農の都を実現するための土地利用基本計画を策定、太陽光発電施設の規制を強化 ・森づくりスタッフの養成・里山倶楽部の活動 丹波の森公苑の里山で活動 ・木の駅プロジェクトの展開 市民の力で間伐、県下唯一、地域全体で活動 ・企業の森づくり 県内初となる企業と住民による協定を締結 ・丹波市森林づくりビジョンの策定 ・篠山市ふるさとの森づくり条例の制定 植林地の間伐100%の計画を実施 ・森林管理100%作戦・災害に強い森づくり ・ささやまの川・水路づくり指針の策定 多自然型の護岸に改修するふるさとの川再生事業を実施 河川における生き物調査を実施 ・日本一の農業の都篠山市の農都宣言 条例に基づく農都創造計画を策定、丹波篠山農学校を開校 ・丹波市有機の里づくりの推進 推進協議会を設立、市立農の学校を開校予定 ・丹波市版半農半公制度 市非常勤嘱託員をしながら農業に従事 ・有害鳥獣被害対策の推進 ・貴重動植物の保護に取り組む団体の活動 ホトトギス、オオムササビ、クワガタ、ハイカマ等を保護・育成 ・セブンソウ、カガリ、クワガタ等貴重種の観察会を開催 ・水切れ域の生物多様性の情報発信 本州一低い中央分水界に水切れ資料館を建設 ・丹波ピオトープランの策定 ・県立森林動物研究センターの開設 野生動物の調査研究拠点施設として全国に先駆けて開設 	<p>グリーンインフラ※の重要性の高まり</p> <p>レクリエーションの場の提供、良好な景観形成、生物生息の場の提供、気温上昇の抑制、保水による防災</p> <p>※ 2015年に国連サミットで採択された持続可能な開発目標（SDGs）と方向性を同じくするもの</p> <p>ふだんは</p> <p>森のスローライフを満喫しています</p> <ul style="list-style-type: none"> ・丹波の一番の魅力、近くの里山を自然と織りなす豊かな暮らしに活かす ・子どもたちが源流の水辺で楽しく遊べるようにして、ふるさとを想う心を育くむ <p>山からほど近い町や山里の集落に暮らし、気候風土の恵みを感じながら山で木を育て、田畑でブランド農作物を育てています。そして、近くの畑で採れた食材で家族団らんの食事を楽しんでいます。</p> <p>なんとといっても、近くの里山を散策し、季節の移ろいを感じる事が一番の楽しみです。</p> <p>子どもたちは学校から帰ると、里山で木登りをしたり、川辺で魚捕りをしたりして、夢中になって遊んでいます。</p>	<p>丹波らしい土地利用を進める</p> <p>集落に暮らし続ける</p> <p>山を守り育てる</p> <p>川や水辺を守り育てる</p> <p>農地を守り育てる</p> <p>野生動植物と共生する（生物多様性を育む）</p>	<p>新規 人口が減少する中であっても、集落の暮らしを大切に守り抜くことを基調とした丹波らしい土地利用を描く（丹波篠山ランドデザイン、丹波市新しい都市構造のあり方の策定）</p> <p>新規 集落と町を結ぶ交通・輸送システムを整備する</p> <p>新規 丹波の森のモデルとなる里山をつくり、広める</p> <p>発展 森づくりスタッフが上記新規事業で活躍する</p> <p>発展 水切れ域の源流の里ならではの水辺の自然環境を再生し、水遊びを楽しむ</p> <p>新規 先端技術で農地を守り育てる</p> <p>発展 新規就農者、集落営農組織、女性農業者、企業、外国人技能実習生等多様な担い手の育成を加速する</p> <p>新規 水切れフィールドミュージアムをオープンする</p> <p>発展 水切れ資料館をリニューアルする</p>	<p>人口減少に対応して、都市機能を集約、効率的な都市経営がなされている。一方で、基幹産業としての農業を担い、風土を保全するという要の役割を果たす集落の暮らしも大切に守られている。集約化により用途廃止された公共施設などの跡地は芝生化され、子どもの遊び場や地域住民の活動・交流の場として活用されている。</p> <p>周辺地区（集落）と都市機能を集約した拠点地区（町）が、自動運転を活用した交通システム、ドローンを活用した物流・宅配システムで、いつでも結ばれており、集落で安心して暮らすことができている。</p> <p>暮らしを豊かにする生活空間として里山を守り育てることの大切さが、30年かけて整備したモデル里山を通して住民に伝わり、各地で集落の裏山が里山として環境整備されている。花や落葉樹の四季の彩り、果樹や山菜、松茸や薪炭の採集、森林浴などを楽しむ生活が広がり、丹波の森の豊かさが地域外の人にも伝わって、交流、移住の流れが強まっている。法整備が進み所有者不明の森林や、寄付のあった森林が里山整備に用いられるなど丹波の森にふさわしい利用がなされている。</p> <p>水切れ域の源流の里として、ささやまの川・水路づくり指針の考えが地域全体に浸透し、自然環境を再生する川の改修が各所で進んでいる。そして、小さな頃から多種多様な動植物とふれあう水遊びの体験が、ふるさとを想う心を育てている。</p> <p>地球規模の人口増加により、食料を供給する農業の大切さが見直され、丹波の風土・特産物に魅力を感じて従事する若者も増えつつある。農地の流動化が進み、集約・大型化された農地は、AI、IoT、ドローン、自動操縦機械を活用したスマート農業で米づくりが行われ、黒大豆などのブランド農産物は昔ながらの手仕事を生かしつつ、ICTやロボティクス技術の活用で省力化や軽労化を図り、高品質農産物を求める消費者ニーズに答えている。また、農業の担い手は多様化し、新規就農者、集落営農組織や企業が増加しただけでなく、女性の割合が高くなり、外国人技能実習生も働いている。</p> <p>氷上回廊を舞台に、公園や資料館を中核施設とし、多種多様な生物の生息地を展示場とする水切れフィールドミュージアムがオープンし、巧みな情報発信により水切れの地域資源がまるごと楽しまれている。環境省の重要里地里山選定地である丹波市青垣町遠坂地区が、生物多様性のモデル、ピオトープランの実践地として全国的に有名になり、丹波の森の優れた環境を象徴する地区となっている。</p>
<p>2 丹波の自然景観を大切に、花と緑の美しい地域づくりを進めます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「丹波景観100選」の選定 ・丹波ランドスケープ広域計画による風景形成 丹波地域のみ、丹波の森づくりを基本理念として上位に置く ・篠山市景観条例等の制定 篠山市景観計画を策定 ・各地区の自然と文化を生かした施設づくり（ゾーンの森づくり） 四季の森公苑、薬草薬樹公園等 ・丹波年輪の里の木工教室等 ・丹波の森の中核となる施設づくりと多彩な自然体験プログラムの実施（シンボルの森づくり） 丹波の森公苑の縄文の森塾、ささやまの森公園の森の学校、丹波並木道中央公園の里山スクール等 ・「ふるさと桜づつみ回廊」の形成 丹波市桜協会の桜並木づくりに始まる ・たんば三街道の並木道整備 ・ハイキングコースの設定 ・サイクリングコースの設定 <p>（ネットワークの森づくり）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花づくり活動の普及・支援 ・たんばオープンガーデンで我が家の庭から丹波の森づくり 園芸愛好家が自主運営 ・花祭りの開催 野上野れんげまつり、清住コスモスまつり等を住民が主催 	<p>人口減少と高齢化の進展</p> <p>人口の偏在、介護需要の増加</p> <p>革新技術のあらゆる分野への浸透</p> <p>AI、ロボット、自動運転、再生医療、遺伝子治療</p> <p>休みには</p> <p>森の魅力をまるごと楽しんでいきます</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森をまるごと「里山」「水切れ」「恐竜化石」のミュージアムにして、楽しみ方をみんなで共有する ・森のマルシェ・バルを広めて、自慢の食材の旬の恵みをみ 	<p>丹波らしい景観形成を進める</p> <p>公園を活かし、自然を体感する</p> <p>森を巡る道を活かし、景観を楽しむ</p> <p>花を飾り、もてなす</p>	<p>新規 個々の住宅も日本の原風景の一部であることを意識し、調和させる</p> <p>新規 里山フィールドミュージアムをオープンする</p> <p>発展 3つのシンボルの森の裏山をミュージアムを象徴する里山に整備する</p> <p>新規 ハイキング、サイクリング、ドライビングそれぞれで森の道を巡り景観を楽しむ</p> <p>発展 寿命を迎える桜づつみのソメイヨシノを計画的に長寿化する</p> <p>新規 町全体を花で飾る</p>	<p>日本の原風景といわれる丹波の森の姿を大切に守っていくという意識が住民全体に浸透している。緑条例の緑化、景観ガイドラインの内容が常に意識され、個々の住宅、店舗、工場などの形態、意匠が背景の山々と調和している。</p> <p>シンボルの森とゾーンの森を中核施設とした里山フィールドミュージアムがオープンし、活動情報が一括発信され、誰もが里山をまるごと楽しめるようになっている。シンボルの森の裏山が、住民や地域外からのボランティアの参加のもと歳月をかけて環境整備され、ミュージアムを象徴する里山となっている。</p> <p>サイクリングとハイキングを気軽に楽しめる地域としてのイメージが定着している。自転車に乗せられる鉄道車両や、各コースの起終点には木陰を有する休憩・着替えスポットが用意されている。桜づつみのソメイヨシノが寿命を延ばしつつ、オオシマサクラやエドヒガンなども混植され、春中、桜が咲き続けている。たんば三街道には並木道とロゴマークが各所に設置され、丹波の森づくりが進んでいることを気づかせている。</p> <p>町や商店街などのエリア全体でテーマ性を持って花を飾り、訪問者をもてなす取組が定着している。店先のミニチュアガーデン、地元産材の木製ベンチ、丹波焼の陶器に生けられた草花、そして個人の庭、道路や公共施設の敷地、さらには修景された空き地・未利用地の樹木が、各所で季節毎に美しく咲き、紅葉し、町全体で訪問者をもてなしている。</p>

丹波の森宣言	これまでの取組
--------	---------

3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。

- ・講座「丹波学」の開催
丹波の森の文化、歴史、人物等を学ぶ講座を開催
- ・「丹波のむかしばなし」の発行
10巻120話の民話、語り部くらぶが活動
- ・民俗芸能保存・継承事業
- ・伝統技術の伝承 丹波杜氏酒造記念館、丹波布伝承館
- ・兵庫県陶芸美術館の開館と陶芸文化の振興
- ・篠山市に2つの日本遺産 デカンショ節、日本六古窯
- ・名木巨木の保全 「丹波の森名木ガイド」を発行
- ・篠山城大書院の再建
- ・古民家や洋館の再生
観光拠点施設、宿泊施設(ホテル)、レストランに再生
- ・柏原城下町の景観形成
企業、商店、個人が(株)まちづくり柏原を設立、活動
- ・県景観条例による地区指定等
篠山市城下町地区、上立杭地区、8件の古民家、洋館を指定
- ・国重要伝統的建造物群保存地区に指定
篠山まちなみ保存会、福住まちづくり協議会が保存活動
- ・篠山城下町地区が国景観まちづくり刷新モデル地区に指定 全国10地区の一つとして指定

- ・恐竜化石を活かしたまちづくり
住民が参加し発掘調査
ちーたんの館、元氣村かみくげ、太古の生きもの館を開設
恐竜化石フィールドミュージアムをオープン
につぼん恐竜協議会を発足

- ・文化の拠点施設の整備たんば田園交響ホール等
- ・丹波の森国際音楽祭シューベルティアーテたんばで音楽の森づくり
民間ボランティアが中心に国際音楽祭を開催
- ・子どもミュージカル体験塾の開催
- ・創作オペラおさん戎兵衛の上演
市民が中心となり創作、上演
- ・映画「森の学校」完成上映
河合雅雄氏の著を脚本に映画化
- ・丹波篠山まちなみアートフェスティバルの開催
城下町の街角に彫刻、絵画、写真のアート空間を創出
- ・スポーツ大会の開催
篠山ABCマラソン大会、全国高校女子硬式野球選手権等

4 丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。

- ・丹波の森大学、丹波OB大学・大学院の開講
丹波の森づくりの実践者“もりびと”を養成
- ・“もりびと”の育成 たんば子ども塾、丹波の森若者塾
- ・“もりびと”による地域活動の展開
地域内全小学校区でまちづくり協議会、自治振興会が活動
- ・丹波の森づくりの各取組の原動力となっている
- ・大学生による地域貢献活動
関西大学、神戸大学、関西学院大学等10大学と連携
- ・移住・定住の促進と空き家活用
両市に住まいと仕事のワンストップ窓口を設置

- ・丹波栗・黒大豆・大納言小豆のブランド戦略、フェアの開催
- ・丹波篠山コシヒカリ宣言
- ・丹波すぐれもの大賞による顕彰

- ・ぶらり丹波路、旅丹、大丹波連携による観光情報の発信
- ・丹波焼の里・城下町直通バスの運行

- ・丹波市復興プランの策定
市民等の提案を受けた先導的事業で再生
- ・防災リーダーの育成
防災情報活用研修などで地域防災の担い手を育成
- ・いきいき百歳体操・いきいきデカポ体操の普及
地域内高齢者の約1割が参加

環境変化 生活者の視点

休みには
森の魅力をまるごと楽しんでます (再掲)

・森をまるごと「里山」「水分れ」「恐竜化石」のミュージアムにして、楽しみ方をみんなで共有する

・森のマルシェ・バルを広めて、自慢の食材の旬の恵みをみんなで分かち合う

四季折々のイベントや祭りなどで、地域内外の人たちが一緒に盛り上がっています。

加えて、里山、水分かれ、恐竜化石をテーマとして週末に開催されるハイキング、木工や水辺のキャンプ、化石発掘体験など多彩なイベントを親子やグループで楽しんでいます。

また、町中や公園で開かれるマルシェやバル、そして農家レストランなどで、採れたての食材を味わう地元ならではのぜいたくを楽しんでいます。

未利用地・未利用施設の増加	大交流時代の到来
放棄林、放棄農地、公共施設跡地、空き家	世界人口増加、旅行者等の増加、経済交流拡大

自分時間に
森づくりを学び実践しています

・少子高齢化社会が進んでも集落の暮らしを感じられるよう、先端技術を農林業に活用する

・大交流時代にあたり、篠山・柏原城下町などの歴史的な町全体をホテルにして、もてなす

30年間進めてきた森づくりを継続しながらも、社会環境が大きく変わっていく中、新たな森づくりも進んでいきます。

少子高齢化が進んでも集落の暮らしを守りぬく必要があります。農林業を次の世代へ継承することに加え、新たな担い手を呼び込み、学校や地域で育成していくことが大切です。

また、大交流時代にあって、国外へ発信し、交流を拡大していくことも必要です。

異常気象と高まる災害リスク
南海トラフ地震、多発する豪雨

取組の方向性	新たに加える取組	30年後の丹波の森のイメージ
--------	----------	----------------

文化と歴史を大切にし、町・建物をつなぐ

新規 歴史的な町をまるごとホテルにして、もてなす

篠山や柏原の城下町、福住や佐治の宿場町、今田町の陶器町には、古民家や洋館を活用した宿泊施設、レストラン、各種店舗があちこちに点在し、博物館や美術館などと一体的に機能している。交通機関の玄関口となる最寄駅は「森の駅」として観光客を出迎え、観光拠点でコンシェルジュがそれぞれを総合案内することで、歴史的な町全体が一つのホテルとなり活用され、リピーターに人気を博している。

恐竜が生きた大地で暮らす

発展 恐竜化石フィールドミュージアムのコンテンツを充実させ、展示施設を拡充する

化石の発見が続き、ちーたんの館は博物館に拡充され、篠山市内の展示施設も充実。川代トンネルが開通した後の旧道はミュージアムのシンボル道路として、沿道に季節を感じさせる桜やもみじが植栽され、エリアの要所にフィールドミュージアムのロゴマークが掲示されている。

森の中で芸術・文化・スポーツを楽しむ

新規 「森の映画館」を楽しむ
発展 全国高校女子硬式野球選手権の聖地にする

VRが普及し、自宅で映像を楽しむことが増える一方で、名作映画を里山やレトロな建物で鑑賞することにも人気が高まっており、「森の映画館」と銘打って、丹波の森公苑の前庭や中庭、古民家レストランなどで上映され、森の中で楽しむ文化のシンボルイベントの一つとなっている。

マラソンの聖地に加え、全国高校女子硬式野球選手権が男子と肩を並べる大会に発展し、丹波市市島町がその聖地となっている。

“もりびと”になって、ふるさとを元気にする

発展 市民プラザや丹波の森協会など中間組織が、“もりびと”の団体の活動を支援する

ふるさと教育や郷土料理による食育、そして学び直しの場が丹波の森大学を中心にさらに充実し、もりびとの育成が進んでいる。これら“もりびと”の団体は、クラウドファンディングの活用や法人化を進め、活動の継続性が高まっている。そして、丹波の森研究所や両市の市民プラザなど中間支援組織が、ノウハウの提供、ボランティアの派遣、団体のネットワーク化などによりそれらの活動をしっかりと支えている。

丹波ブランドを育成し、産業を振興する

発展 「森のマルシェ・バル」でブランド農産物やジビエを楽しむ
発展 丹波ブランドを情報発信するための拠点を整備し、ブルーベリーや黒ゴマなども新たにブランド化する

食育が実を結び、子どもから老人まで地元食材への愛着が増し、地域産業全体で丹波ブランドをささえる仕組みが本格化している。

「森のマルシェ・バル」で、採れたての農産物やジビエを味わう地元ならではの楽しみ方が広がっている。また、丹波の特産物を使ったケーキや雑貨などオシャレでセンスのある物が販売されている。

世界での遺伝子操作による品種改良の流れに対して、丹波地域固有の風土の中で育てるブランド農産物の輝きは一層増している。情報発信の拠点が整備され、丹波栗、黒大豆、大納言小豆、山の芋を基軸に、新たなブランド農産物ブルーベリー、黒ゴマ、実エンドウなども発信されている。

丹波ファンを拡大し、交流を促進する

新規 丹波の森の魅力をまるごと紹介できる施設を整備する
新規 宿泊施設を整備し滞在型旅行者を招く

リニア新幹線が大阪まで開通、北近畿豊岡自動車道が全線開通。京阪神だけでなく全国から短時間で立ち寄れる地域となっている。また、自動運転の活用により、まち中心部から観光名所各地へも簡単にアクセスできる。

森の魅力をまるごと紹介する施設が整備され、国内外からの来丹波者や移住者が“丹波の森”をまるごと楽しんでいる。

また、農家民宿や空き家、空き施設、廃校などを活用した宿泊施設の整備、交通の要所などへのホテルの誘致が進み、「日帰り観光」から「滞在型旅行」へのシフトが進んで、ひょうごゴールデンルートの拠点(神戸・姫路・城崎)からの周遊が増えている。

大交流時代に対応する

新規 海外の企業や人に“もりびと”として活躍してもらう
発展 原風景、絶品の農産物、伝統工芸など丹波の森の魅力を国外にも発信し、人と物の交流を拡大する

ブランド農産物はもとより、丹波焼、丹波布、丹波杜氏のつくる日本酒などが、インターネット経由で海外と盛んに取引されている。

日本の原風景を大切に守り、絶品の農産物、伝統工芸などの地域資源に磨きをかけ、農業体験や工芸体験をとおしてその魅力に直接触れることができる丹波の森への注目が高まり、さらには、携帯端末を介した自動通訳、ナビゲーションも普及し、国内外から何度も訪れる丹波ファン(交流人口)が増えている。

このような交流の中から、丹波の森に魅力を感じ、海外から進出してくる企業や人材が増えている。

安全安心な地域をつくる

新規 空き家を災害時の避難住宅として利用する
発展 いきいき百歳体操が全ての高齢者が参加できるまで拡がり、元気な高齢者が増えている

南海トラフ地震の経験を機に、復興公営住宅の建設などの公助の限界を知ることとなった。共助の思想が広がり、空き家へ避難住民を受け入れる体制が構築されている。

山裾の余裕域(バッファゾーン)を設定する土地利用が進み、災害発生残土を利用して整備された栗園が成熟するなど、平成26年豪雨災害からの復興が「丹波市復興モデル」として全国に知られている。

いきいき百歳体操が全ての自治会で開催され、地域内の高齢者が全て参加可能となっている。ICTネットワークによる医療、保健、福祉、介護の切れ目のないサービスがその展開を支えている。